

平成一二年二月二七日（日）

第二七四回史跡めぐり資料

渋沢栄一翁生誕の地
深谷市と周辺の史跡めぐり



渋沢栄一翁

越谷市郷土研究会

深谷市の概要

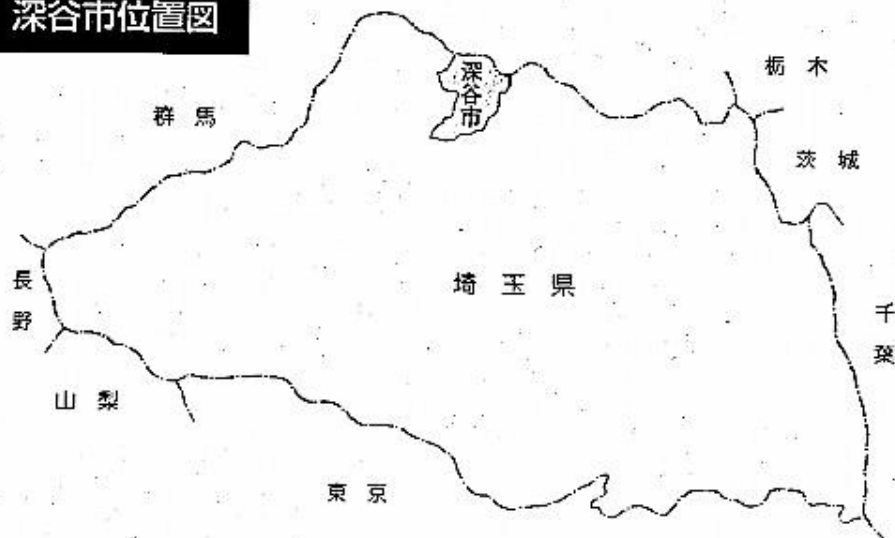
深谷市は昭和30年1月1日深谷町を中心として藤沢村、幡羅村、明戸村及び大寄村が合併して市制が敷かれ、その後昭和48年には豊里村とも合併され今日に至っている。

産業の中心は『深谷ねぎ』で代表される農業でその粗生産額は県下一とされている。

工業も昭和34年に工業団地が造成されて、82工場が誘致され、既存の産業と共に著しい展望を見せている。

深谷市は、明治、大正、昭和の初期にまたがり大実業家として、また社会事業家として活躍した渋沢栄一翁の生誕の地であり、また中世室山時代の上杉氏の深谷城跡もあり歴史と伝統に築かれた街である。

深谷市位置図



渋沢栄一翁生誕の地 深谷市と周辺の史跡巡り

日 時 平成12年2月27日午前7時45分(日)

集合場所 武蔵野線南越谷駅前東口

参加費 6,000円(交通費、昼食代、入館料等)

行 程

南越谷(8:00)→(外環道・関越道)→高坂S/A→(環)→本庄・児玉I/C→(環)(R17)→(環)(上武線)→★満徳寺資料館→(環)(上武線)→★渋沢栄一記念館→昼食→★渋沢栄一の生家(群馬県館)→(環)→★日本煉瓦製造(株)資料館→(環)→☆JR深谷駅→(環)→本所・児玉I/C→(環)(関越道)→三芳S/A→(環)(外環道)→(18:30)南越谷

〔摘要〕

- 1 ★満徳寺資料館(群馬県尾島町徳川) (館内の見学及び説明聴取。)
江戸時代、満徳寺は鎌倉の東慶寺と並んで日本で二つだけの縁切寺だったが、満徳寺は檀家を持たず、徳川家の庇護のみに依存していたので、明治維新を迎え、徳川幕府が瓦解するとともに、廃寺を余儀なくされた。そこで、縁切寺満徳寺の歴史的・文化的意義に鑑み、尾島町では縁切寺満徳寺資料館の建設を計画し、当資料館は平成3年8月に完成し、平成4年10月に開館された。
- 2 ★渋沢栄一記念館 (館内の見学及び説明聴取。)
渋沢栄一の功績を顕彰する目的で、翁の写真や伝記資料が展示されている。
- 3 ★渋沢栄一の生家(群馬県館) (館内を見学。)
現在、外国人の留学生の日本語研修などに利用されている。
- 4 ★日本煉瓦製造(株)資料館 (館内の見学及び説明聴取。)
日本煉瓦製造(株)は、明治20年(1887年)渋沢栄一、諸井恒平等によって創立され、深谷に日本最初の近代的な機械成型による煉瓦工場が建設された。現在資料館になっている木造洋館は、明治政府の招きで来日したドイツ人技師ナスチェンテス・チーゼの居館として、彼自身の設計で明治21年に完成された。この建物と当時の先端技術で築造されたホフマン式輪窯のうち現存する第6号窯及び煉瓦造りの旧変電所は、平成9年4月、国の重要文化財に指定されている。
- 5 ☆JR深谷駅(車窓より)
『ほおー、東京駅に似ているねえ』
『本当だ。レンガでできているんだねえ』
明治政府の要請で、渋沢栄一がその創立にかかわった日本初の機械式レンガ工場がこの地にあり、ここで焼かれたレンガで、迎賓館や旧法務省そして東京駅も造られた。
深谷市では、渋沢栄一の功績を顕彰してレンガを活かした街造りを進めており、この駅は街造りのシンボルとなっている。

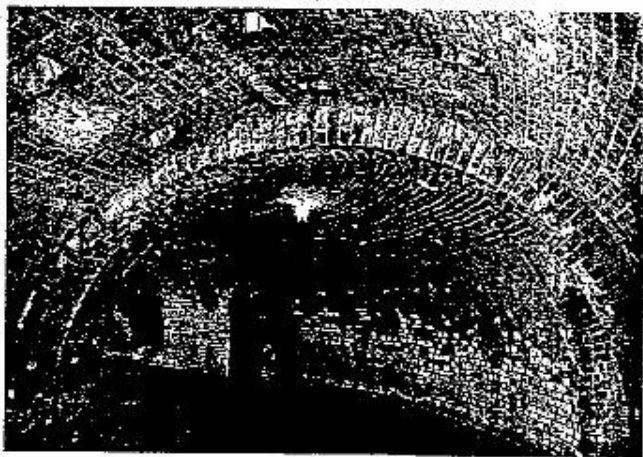
渋沢栄一の生地（中の家）母屋



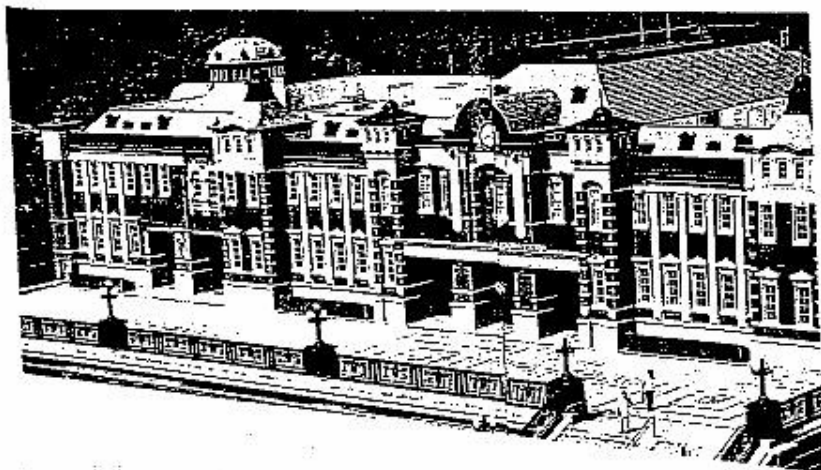
日本煉瓦資料館と輪窯

ホフマン輪窯6号窯

▼旧事務所(日本煉瓦史料館)



深谷駅



● 青淵渋沢栄一翁について

天保十一年（一八四〇年）栄一は、現在の深谷市大字血洗島に市郎衛門、栄夫婦の子として生まれた。

幼少の頃父から学問の手ほどきをうけ、次いで従兄弟の尾高惇忠に就いて漢学を修め後に青淵とも号す。一五歳の頃には中国の古典を広く読破したといわれている。

青年時代尊皇攘夷論に共鳴していた栄一は、老中安藤信正が坂下門外で水戸浪士に襲われた文久二年（一八六二年）二三才の時、結果は中止されたが、尾高惇忠、尾高長七郎（尾高惇忠の弟）、渋沢喜作（栄一の従兄弟）等と共に高崎城の乗っ取りを計画したことがあった。

この計画は、惇忠を中心に栄一、長七郎、喜作等総勢六九人で先ず高崎城を乗っ取り、兵を興し鎌倉街道を進んで横浜を焼き払い異国人を切り殺し、幕府を討つという荒唐無稽な計画で、その決行を翌年の文久三年十一月二三日と決め準備が進められた。しかし決行の直前、京都へ様子を見に行つて帰つて来た長七郎が、急進公卿中山忠光（明治天皇の叔父）を盟主とし、土佐の吉村實太郎、備中の藤本鉄石、三河の松本奎堂の三人を総裁とする約三〇名で興された討幕軍が、最後は十津川で幕軍に包囲され壊滅した（天誅組の乱）例を引いてこの計画は無謀であると反対したため中止された。

このようなことも有り、後幕吏の目から逃れるため、また京都の政治情勢をさぐるため、伊勢神宮に参拝すると称して京都へ渋沢喜作と共に赴いた。この時、栄一等は一橋藩用人平岡円四郎の家来ということで、円四郎の厚意で道中手形を入手したが、その頃一橋藩主徳川慶喜は、皇居の御守衛総督として京都にいた。

京都に滞在していた栄一と喜作は、円四郎から「実は、幕府から君達二人が本当に私の家来でなければ、引き渡してくれと言われていた。」と告げられ、そして「君達二人を幕府へ引き渡せば牢に入れられる。牢に入れられれば十中八九病気になって病死する。それではいかにも気の毒だ。ここに一つ助かる道がある。それは君達二人が本当に一橋家の家来になることだ。」と仕官を奨められた。二人は、徳川一門の一橋家に仕えることは、命惜しさの変節だと一度は断ったが、円四郎から「入牢し、牢死すれば、討幕の志が遂げられないではないか。一橋家は尊皇の家柄だ。一橋家に仕え徳川内部から討幕の気運を高めることも出来る。」と説かれ、栄一と喜作は一橋家に仕えることになった。

一橋藩々主慶喜は皇居の御守衛総督として皇居を守る役職についていたが、藩は兵備が手薄のため、事があつたとき職を全うすることが出来ないというのが実情であつた。これを憂いた栄一は、一橋家の領地、摂津、和泉、播磨、備中の四カ国から農兵を募り常備軍を創設するならば、少額な費用で強力な軍備を調えることが出来ると献策したところ、これが採り上げられ、「歩兵取立人選御用」という役職を命ぜられ、栄一は摂津、和泉、播磨、備中の四カ国の領内を回り二五〇人の壮丁を集めた。

また栄一はこの領内回りで知り得た領内の実情をもとに、次のような藩財政改革も献策した。①摂津で安く売られている年貢米を灘や西の宮の造り酒屋へ値売りする。②播磨の木綿を大阪へ廻送して売る。③備中の古い家の床下から硝石が多量にできるので硝石製造所を設ける。④引替えの正貨を準備し、藩札を発行して領内の金融の便を図る。この栄一の献策は採り上げられ、藩財政改革に寄与するところが大であったと伝えられている。後年第一国立銀行を設立し、新興日本の実業界で多方面に渡って活躍した栄一の財界人としての素質は、この領内回りで既に芽生えていたのである。

また栄一の商才については次のような逸話が伝えられている。

栄一の家は農業、養蚕のほか、当時「武州紺」と呼ばれていた染料のもと藍玉の製造も行っていた。栄一も父市郎衛門の供をして藍葉の仕入れに出かけていたが、栄一が一四才の年、父に用事が出来て、栄一と祖父とが藍葉の買い出しに出かけることになった。生意気盛りの栄一は祖父を残し、一人で買い付けに行った。売手は栄一を子供扱いしてろくに相手にしなかったが、栄一のセリフが大人びていて「おじさん、この葉は肥料が足りなかったね。これはシメカスを使わなかったらう。こいつは乾燥が不十分じゃないか。」などと一々凶星を指すので、売手が驚いたり面白がったりしているうちに栄一は上質の藍葉を安く仕入れてしまったということである。

このように商売の才能もあり豪農の家に生まれた栄一が、命の危険も顧みず何故「尊皇攘夷と討幕」の思想を抱き、その流れに身を投じたのであろうか。

ある時。血洗島村の領主阿部撰津守の代官陣屋から、市郎衛門に呼出状が届けられた。市郎衛門は生憎風邪で臥せていたので、一七才の栄一が名代として出頭した。陣屋には親類の波沢宗助も呼び出されていて、代官は二人に「この度藩主のご息女様がお興入れ遊ばすことになった。ついては諸事お物入りにつき、その方どもに御用金を申し付ける。波沢宗助は千両、波沢市郎衛門は五百両。お目出たい御用金だから名譽この上ない。有難くお受けするように。」と告げた。宗助は即座にお受けしたが、栄一は私は名代ですから帰宅の上、父に伝えた上ご返事致しますと即答を避けた。代官は立腹して「戯けたことを申すな。その方は一体お上の御用を何と心得ている。これしきの事が即答出来ないで親の名代と申せるか。もっと分別を出せ。即刻お受け致さねば、その分には捨ておかんぞ。」と脅したが、栄一は頑として即答しなかつた。陣屋からの帰り道、栄一は「ロクでもない人間がただ侍というだけで大きな顔をして、人の金を貰うのにさえ威張り散らすのは、とどのつまり、現在の幕政が悪いからだ。士農工商という階級制度が間違っている。」と考えた。このような体制への反発が、水戸学を学ぶ青年栄一を「尊皇討幕」の意識へ駆り立てたといわれている。

栄一が生まれた天保一年には清朝のアヘン禁輸措置からイギリスと清国との間で戦争が起こり、近代装備を誇るイギリス軍の前に、旧態依然の清国軍はあっけなく敗退し一三年（一八四二年）には、①上海など五港の開港②香港の割譲③イギリスの領事裁判権の承認④清国の関税自主権の否認などを取り決めた清国にとって屈辱的な南京条約が

締結されていた。日本文化の故郷ともいわれていた大清国の敗北は、当時の日本の知識人に強い衝撃を与えた。また、イギリスの清国進出はロシア、フランス、アメリカなど列強諸国を刺激し、その砲口が日本に向けるれぬ保証はないという危機感を幕府や諸藩に抱かせ、それぞれ海防施策に力を入れさせるようになっていた。そしてそれと絡んで激しい攘夷論が国内に起っていた。

これらの国内外の諸情勢が憂国の青年栄一を攘夷論に走らせたのではなからうか。特にアヘン戦争については「夷狄の紅毛人が私利私欲のために有毒なアヘンを清国の民に売りつけ、それを国が蔽禁したからといって戦争までしかけるといふそんな非理非道があるか」と多感な若き栄一を憤らせていたということである。

慶応二年（一八六六年）七月二一日、第二次長州征伐のため大阪城に入っていた将軍家茂は、幕府軍の敗退が続く中、城中で二一才の若さで死んだ。家茂の世子は定まっていなかったが、後継者として、栄一の主君である一橋慶喜が、衆目の一致するところであった。慶喜は同月二七日、先ず徳川宗家を相続し、そうして同年十二月五日一五代将軍に就任した。

慶喜の将軍就任について、後年栄一はその篇著『徳川慶喜公伝』にこう記している。「余は失望落胆、不平、不満やるかたなかりき。」平岡円四郎に「一橋家は尊皇の家柄だ。一橋家に仕え徳川内部から討幕の気運を高めることも出来る。」と諭され、奨められて一橋家に仕えた栄一にとっては、幕臣になることはミイラ取りのミイラでその心積

は複雑なものであったと考えられる。

慶応三年（一八六七年）正月十一日慶喜の弟徳川昭武は、將軍の名代としてナポレオン三世の招きで世界大博覧会へ出席のため渡仏した。一行は総勢二九名。その中に慶喜の命で二八才の栄一も随行していた。曾ては攘夷論者で『アヘン戦争』に激昂した栄一が、紅毛人の夷狄の国へ渡るのである。しかし栄一の外国観は曾てのものではなかった。また栄一自身も幾多の功績をあげ、一橋家で頭角を現し、主君慶喜からその将来を囑望される青年に大きく変身していたのである。

ヨーロッパで栄一は三つのことに驚愕した。一ツは『株式組織』である。フランスでは銀行や会社が大衆の金を集めて大規模な営利事業を営み、その利益を大衆に還元し人々の生活を豊かにし、そしてそのことが国を富ませていることである。栄一は、これを手本とし、帰国後日本で最初の合本（株式）組織『商法会所』を駿府に設立した。そして明治六年（一八七三年）には三井組と小野組を説いて出資させるともに一般の投資も募って日本最初の銀行『第一国立銀行』を創設し実業活動の拠点とした。二ツ目は日本みたいな『官尊民卑』の思想がないことである。フランスでは昭武の補導役として銀行家フロリヘラルド、また武術指南役として陸軍大佐ヴィレットが付けられ、この二人がエスコートを勤めてくれたが、『武家』である陸軍大佐ヴィレットが『町人』である銀行家フロリヘラルドに敬意を払っていることを見て、階級制度の厳しい日本から来た栄一は驚かされた。そしてこの国では、人が人から尊敬されるのは、その人の階級や

役目でなくその人自身の知恵、能力、徳望によつて尊敬されていることをしつて深く感動した。三ツ目は、ベルギーを訪れたとき、昭武がリエージュの製鉄所を見学したときいて、国王レオポルド一世が「それはよいところを見学なされた。およそ世界中で鉄を多く生産する国は必ず富み、また鉄を多く使う国は必ず強くなる。日本も強くなるためには、鉄をドンドン使わなければならない。その節は、ぜひわが国の鉄を買つて欲しい。」と述べたことである。『武士は食わねど高楊枝』の国に生まれて育つた柴一には、一国の国王とあろう者が、このような商売人の売込のような口を聞いてよいのだらうかと疑つた。しかし熟慮の結果、王のこの国家的商魂は是認しなければならぬといふ考えに至つた。パリから故郷の尾高惇忠に宛てた手紙の中で、柴一は「西洋の開化文明は、聞いていたより数等上で驚き入ることばかり、以前の考え（攘夷）と反対となるが、日本は孤立（鎖国）するなど思ひの外、わが国は外国と深く接し長ずる点を学び取らなければならない。」といふ趣旨の事を記している。

パリ滞在中昭武一行は徳川幕府の瓦解を知り、帰国を急ぎ、明治元年（一八六八年）十一月三日横浜に着いた。柴一の主君慶喜の身には大きな変化が起きていた。慶喜は大政を奉還し、將軍職を返上したが、巻き返しを計り旧幕軍と会津・桑名の藩兵を率いて大坂から京都に進撃した。しかし鳥羽・伏見の戦いに敗れ、新政府に処分され、駿河で謹慎の身であった。徳川宗家は田安亀之助（徳川家達）が相続し、石高は、駿河において、わずか七〇万石を与えられているに過ぎなかつた。

昭武は、兄の水戸藩主慶篤がその年の四月六日に病没していたので、帰国後慌ただしく、二五日藩主に就任した。

フランスから帰国した栄一は、昭武から託された慶喜宛ての書状を持参して謹慎の慶喜が身を寄せる静岡の宝台院を訪れ、フランスの帰国報告をして旧主慶喜の無聊を慰めた。そして慶喜から昭武宛ての返書を預かるため静岡に滞在していると、静岡藩から栄一は『勘定組頭』を命ぜられた。静岡藩への出仕は、栄一の身を案ずる慶喜の陰の計いであつた。

幕末の水戸藩は、佐幕の保守門閥派と尊皇攘夷派（後天狗党結成）とが争い藩内は亂れ、それは慶喜身边にも及び、慶喜の用人平岡円四郎が水戸の尊皇攘夷派の脱藩者に暗殺されるという事件も起きていた。維新後、水戸藩政は、幕府の滅亡で、保守門閥派に追われた天狗党の生き残りの者が把握するものとなっていた。このような事もあるので、円四郎と繋がりがあった栄一が水戸に赴けば、身に危険が及ぶこともあると慶喜は考え、栄一の静岡藩への出仕を計らつたものと考えられる。

静岡藩で『勘定組頭』に就任した栄一はやがて職を辞し、静岡に『商法会所』を設立し、実業家として第一歩を踏み出したが、明治二年十一月、明治政府から出頭するようにと呼出し状が届けられた。栄一が出頭すると、『租税正』に任ずるといふ辞令が手渡された。栄一は明治政府に出仕する気がなかつたので、政府の首脳大隈重信（明治四年の鹿藩置県後の官制の改めで参議に就任）のところへ断りに行ったが、大隈重信から

「君が旧主の恩誼を忘れないのは床しい話だ。しかし現在の日本は働きのある者が力を合わせて国を立て直す大切な時期だ。個人の情誼にこだわっている場合ではない。君が出仕を断ることは、慶喜が故意に旧臣を新政府に近付けないようにも受け取られ慶喜のためにも君のためにも良くない結果となる。」と説かれて、栄一は就任することになった。

政府で栄一は歳入と歳出のバランスに留意し、健全財政の確立に腐心したが、ある時国の予算編成の際、大蔵卿の大久保利通が陸海軍の予算要求をウノミしたので、大蔵大丞である栄一が「国家に軍備が必要なことは心得ているが、歳入の見込が定まらない段階で、巨額な歳出を決定するのは、財政上危険この上ない処置である。」と具申ししたが大久保は栄一の意見を無視した。

このような事もあり、役人に嫌気が差し退官を考えるようになった栄一は、明治六年（一八七三年）辞表を出して退官し、実業界へ再び転身した。

実業界では、第一国立銀行の設立を始めとして各種の企業の設立に携わり、設立に関わった企業の数に五〇〇余に達したといわれている。栄一は『論語』を道標とし事業活動の指針として「道徳経済合一」を説いていた。論語の中に「不義ニシテ富ミ且ツ貴キハ、ワレニオイテ浮雲ノゴトシ」という言葉がある。確かに金儲けのために手段を選ばないというこは良くないが、社会に必要な事業を起こしてリーズナブルな利益を得ることは、決して浮雲のようなものでない。企業のリーズナブルな利益の追及

は經濟の活性化、社會の發展を促し、國民生活の向上に繋がるというのが榮一の考えであつた。

また榮一は、明治七年（一八七四年）東京養育院の設立に関わつて以来、生涯六〇〇以上の社會事業に携わつてゐるといわれている。明治の初期においては、社會保險生活保護、社會福祉というような國民の生存權を保障する制度は確立されていなかった。というよりそのような觀念を為政者は殆ど持ち合わせていなかった。従つて、慈善事業などやるから依頼心の強い怠け者が増えるのだという暴論が社會に横溢してゐた。このような時代に榮一が養育院の設立に関わつたことは特筆すべきことである。

榮一の母榮は、非常に慈悲深い女性で、氣の毒な人がいると黙つて見ていられず、誰彼の差別なくものを与えたという。榮一の郷里の鹿島神社の境内に共同浴場があつたがある時、そこに癩患者の女が入つてきたので、入浴者が氣味悪がつて逃げ出してしまつた。しかしそれを氣の毒に思つた榮は、癩患者と一緒に入浴して背中まで流してやつたため、周囲の者からも呆れられたさうである。

榮一が九一才になつた年の暮れ一二月、風邪のため臥せていたある日、全國方面委員（現在の民生委員）及び社會事業に携わる者の代表が面會を求めた。用件は、この年の暮れに二〇万人の窮民が寒さと飢え苦しんでいる。しかし予算がないということと救護法の適用が遅れている。救護法の早期適用について榮一に尽力して欲しいというものであつた。話を聞いた榮一は、大藏大臣と内務大臣に陳情するため、外出の支度を家の者

に命じた。家の者と主治医が熱のある高齢者の冬の外出は危険であると止めると「先生のお骨折りで、こんな老い耄れが養生しておりますのは、せめてこういふときのお役に立ちたいからです。もしこれがもとで私が死んでも、二〇万人の不幸な人が救われれば、それこそ本望じゃありませんか。」と静かに云って車上の人となったというのである。栄一の社会事業に対する深い関心は、癩患者の背を流したともいわれ、母栄の教えに育まれたものではなからうか。因みに後年栄一は、癩予防協会々頭も引き受けている。



▲侍姿の栄一

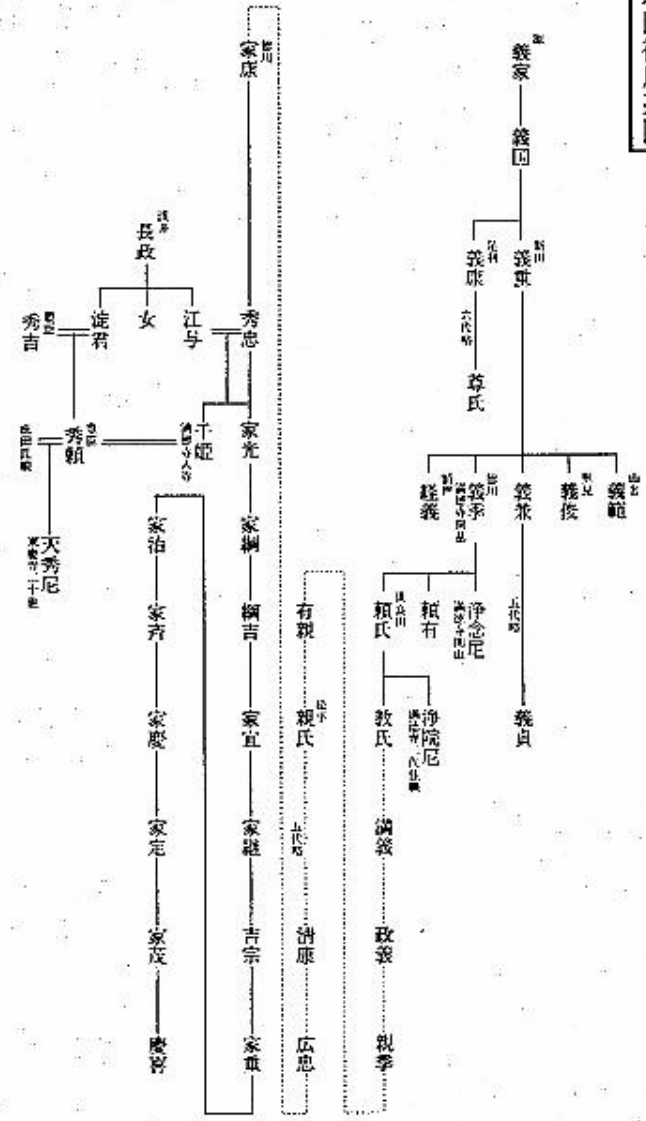
昭和六年（一九三一年）十一月十一日、「青い目の人形」件のでも知られて世を去った。国際親善にも努めた栄一は数え九二歳で内外の人々に惜しまれながらも知られて世を去った。

● 満徳寺

う家 存鎌 能院さ 謁を 特てて い紀お氏娘
 に康東在倉しがのせ縁 (の差徳別、い鎌るのそ縁浄満
 しか慶しのかあ持て切 (注栄配川に天る倉。はらの念徳
 てら寺え東しつづく寺)にし郷庇正。時 じく者尼寺
 い「のた慶「たアレと 家よたの護一こ代 め新ががの
 た何二の寺江とジたはく平康くの百し六の、 に田住開「
 だか十はの戸お「尼、に郷のすは姓た年義義 時氏職山由
 き願世、二時もル寺江あに系る、は(季季 宗のにし緒
 たい天徳つ代わ性の戸た来図な正勝そ一をは の没なた書
 「な尼家け期る。残でに新松 別隼差ち一家地の (ととれ法
 といは康で以。と、離田平一の人し百年のの 道も伝、申
 願か、のあ降。も「婚源家五地、石、始徳
 い「豊孫つ、幕。考駆を氏の娘紀にあ、行徳月注に、ちとな
 出と臣娘た幕。えけ求め系婿の半つ将列寺、)ちとな
 聞秀千。府。ら込みて図と半つ将列寺、)ちとな
 天れの息か寺公認さ、女かと東され、禁もんだとの弥れわ座地、御は(得
 秀、女かと東され、禁もんだとの弥れわ座地、御は(得
 の「でわ慶れた、制「だとの弥れわ座地、御は(得
 継開徳り慶れた、制「だとの弥れわ座地、御は(得
 母山川が深が縁、の駆女も末とてりしと御は(得
 あり康いと江寺は、寺入をわの乗る。した)と郷四 確
 たの縁上い戸は、は寺濟て川時。はと。しを郎と徳と 実
 る縁切意わ代こ、は「しい家宗の、は遊 満わ 年川も 記
 千切意わ代こ、は「しい家宗の、は遊 満わ 年川も 録
 の御東慶い通上州。ての満徳寺と相 一とでる。夫、征夷が、三河の松 満
 尽寺慶い通上州。ての満徳寺と相 一とでる。夫、征夷が、三河の松 満
 力法寺に。入寺す、しなとき、 的にうのは縁切切寺的は達機
 も断入寺す、しなとき、 的にうのは縁切切寺的は達機
 あり絶、しなとき、 的にうのは縁切切寺的は達機
 東慶いとき、 的にうのは縁切切寺的は達機
 寺よ、 的にうのは縁切切寺的は達機

新田徳川系図

縁切寺は、康から特認められた川といわれて千姫が桑名城主本多忠刻と再婚するに
 大坂が落ち、家康と豊臣家の縁を切るため徳川に戻った千姫が桑名城主本多忠刻と再婚するに
 実際は千姫の腰元の、幕府は満徳寺の縁切寺を認めたとはいわれない。女性を憐れに
 思はう。千姫の願いもあり、幕府は満徳寺の縁切寺を認めたとはいわれない。女性を憐れに





満徳寺駆け込みの図

◆本資料の参考文献

東縁徳新幕日渋
慶切川版末本沢
寺寺三○日維史榮
と満○本新展一
駆け徳○藩史を望
込み資○藩史を望
み館最資料る第
女解の藩主集○卷
説書

有隣社
人物事典

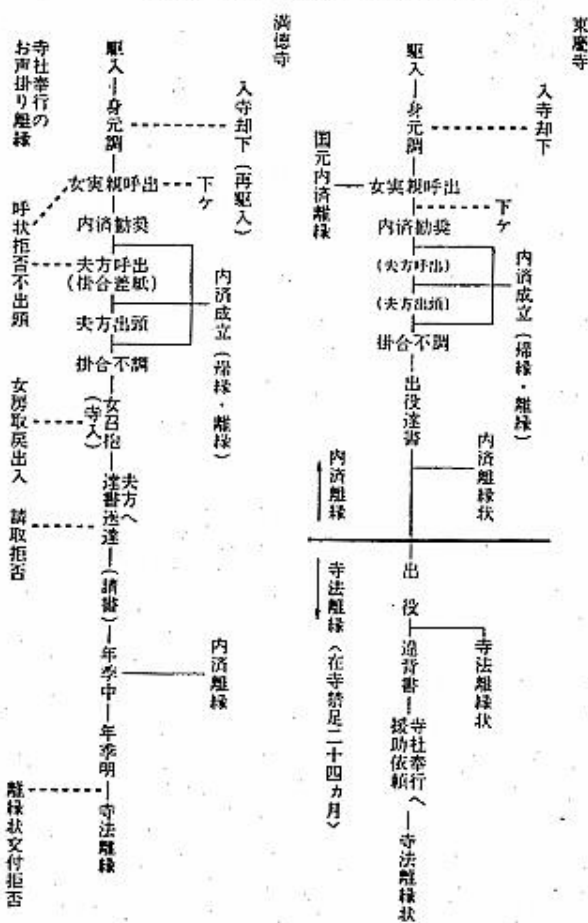
◆担当

井上禪定著
平川陽三

旺文社
日本書籍
新人物往来社

渋沢秀雄著

東慶寺・満徳寺の縁切寺法手続き図解



深谷市の概要

深谷市は昭和30年1月1日深谷町を中心として藤沢村、幡羅村、明戸村及び大寄村が合併して市制が敷かれ、その後昭和48年には豊里村とも合併され今日に至っている。

産業の中心は『深谷ねぎ』で代表される農業でその粗生産額は県下一と言われている。

工業も昭和34年に工業団地が造成されて、82工場が誘致され、既存の産業と共に著しい展望を見せている。

深谷市は、明治、大正、昭和の初期にまたがり大実業家として、また社会事業家として活躍した渋沢栄一翁の生誕の地であり、また中世室山時代の上杉氏の深谷城跡もあり歴史と伝統に築かれた街である。

深谷市位置図

